

京都大学	博士（地域研究）	氏名	山本 佳奈
論文題目	季節湿地における土地利用の変容と住民の対立 ータンザニア・ボジ高原の事例ー		
（論文内容の要旨） タンザニアでは構造調整政策が始まった 1986 年以降、経済の自由化、地方分権化、土地制度の改革、貧困削減などの政策が次々と実施されるなか、農村部では人口増加や農地の拡大によって土地不足が深刻化していった。国内有数のコーヒー産地として知られるタンザニア南部のボジ高原でも住民が共有していた季節湿地の耕地化がすすんでいった。本研究では、季節湿地をめぐる住民の対立と和解のプロセスを追いながら、共有地の利用の変遷とその社会的影響について論じている。 第 1 章では、季節湿地における利用形態の変化をアフリカの現代的な環境問題に照らしながら、本研究の背景と目的を示している。近年、市場経済が農村の暮らしに深く浸透して個人による私的な農地拡大が生態系の劣化を招いている。また、環境の維持・管理は地方自治体やコミュニティに委ねられてきた。この研究は、新たな生態・社会環境のなかで多様な思惑をもった住民と行政が地域の共有資源を再定義していくプロセスを総合的に把握することを目的としている。 第 2 章では、ボジ高原の生態環境を概観しながら、そこに暮らすバントゥ語系民族ニイハの社会・宗教・歴史について解説している。ボジ高原にはなだらかに起伏する丘陵がひろがり、そのなかを細かく分岐した季節湿地が枝状に刻み込まれている。かつてこの地域では焼畑耕作が営まれていたが、20 世紀のはじめにコーヒー栽培が導入されると、農業はコーヒーを核とした常畑耕作へと変わっていった。第 3 章では、農耕と牧畜と生態環境の有機的な関係、および農業体系のなかで季節湿地が占める位置を分析しつつ、牧畜システムの変容とその社会的な背景を明らかにしている。 第 4 章では、季節湿地の生態的特徴とそこでの伝統的な農法について詳述するとともに、土地利用の変遷、さらに湿地の耕地化が土地利用の慣習や生態系におよぼす影響について論じている。ニイハは季節湿地を放牧地として利用するだけでなく、その生態的特徴を活かした在来農法を発達させてきた。季節湿地は基本的には村の共有地であったが、農地が不足するにつれて個人による湿地の常畑化がすすんでいった。湿地の耕地化による周辺環境への大きな影響は、現段階では認められなかった。 第 5 章では、季節湿地における耕地拡大の実態を、土地利用や牧畜システムの動向に関連づけながら分析している。タンザニアの農村経済が市場との結びつきを強めるなか、調査地域ではコーヒー栽培がますます拡大し、さらに人口の増加が農地不足に拍車をかけていった。各世帯は一定の収入を確保するため食用畑をコーヒー園に換え、それに伴う食料の減少分を季節湿地の生産で補填しようとした。そのため、湿地では急速に私的な保有地が拡大し放牧地は大幅に縮小していったことを明らかにした。			

このような湿地開発は住民の総意のもとですすめられたわけではなく、社会内部では湿地の利用をめぐる住民のさまざまな思惑が衝突していた。第6章では、湿地開発の推進派と、湿地に残る神聖な森や放牧地を守ろうとする伝統的な首長・長老層および村評議会との対立と和解のプロセスを取り上げている。当初、両者はそれぞれ生存基盤の確保と土着信仰への畏敬を主張して激しく対立したが、やがて互いの主張を聞き入れながら折衷案を模索するようになり、最終的には神聖な森と放牧地の一部を残しつつ湿地開発をすすめることで合意した。住民がコモンズの利用形態を改変する過程で、経済性や生産性だけを優先するのではなく、慣習や他の生業にも配慮して社会の均衡を保ちながら新しいコモンズを構築していった実態を明らかにした。

第7章では、別の村の事例を取り上げ、季節湿地のいきすぎた耕地化への反発から、私有化された湿地が再び元の共有地に戻るまでの経緯とその対立の意味について論じている。湿地での耕地拡大で放牧地が断片化・狭小化したことにより、各放牧地を使用する個人が限定されて用益権者が明確化していった。ところが、村評議会がその放牧地を農地として分譲してしまったことで、用益権をめぐる土地の購入世帯と放牧世帯が激しく対立するようになった。結局、当事者だけではこの争いを解決できず、県行政が介入して係争地は元の放牧地に戻されることになった。本章では、住民が資源の利用とコモンズの意義について協議し、行政を巻き込みながら主体的に解決策を導きだした事例を分析し、地域の内発性という観点から議論を展開している。

第8章では、現代アフリカにおけるコモンズの変容を総合的に考察している。本論で示した一連の動きは、資源利用の歴史の過程で形成されてきたコモンズへの暗黙の共通認識に変更を迫るものであった。住民は対立をとおして議論を重ね、それに行政が加わることで新たな共通認識を導きだしていったが、それはタンザニアにおける環境ガバナンスの可能性や方向性を提示するものであった。そして、湿地に残された放牧地や神聖な森は、ウシ飼養や精霊・祖霊の信仰の伝統が深く潜在することを前提としたローカル・コモンズの存続と、無秩序な環境開発を抑制する象徴として機能していると結論づけた。

(論文審査の結果の要旨)

市場経済の動きが活発化しているアフリカの農村部では、経済活動が生態環境への負荷を高め、慣習的な利用とのあいだにさまざまな軋轢を生じてきた。コーヒー産地として知られるタンザニア南部のボジ高原では、1980年代以降、土地不足の深刻化に伴って、それまで放牧地として共同利用されてきた季節湿地が急速に耕地化されていった。本研究では、季節湿地の耕地化をめぐる住民間の対立と和解の事例をとおして、慣習的な環境利用が再定義され、新たな形態のローカル・コモンズが社会のなかに再構築されていくプロセスを追っている。この博士論文は、現代アフリカにおけるコモンズの実態を農村内部の視点から総合的に捉えた貴重な研究成果であり、以下の学術的な貢献によって高く評価することができる。

1) まず、経済・社会・政治のグローバル化に対する農村内部の動きを総合的に把握した点である。論文では、地域を取り巻く社会経済の状況が急速に変化するなかで、共有資源に対する新たな利用と管理の体制が形づくられていくプロセスを丹念に記述・分析している。そこには、一部の住民が見せた慣習を打ち破ろうとする先駆的な動きと、それに対する他の住民の抵抗、折衷案の模索、そして新たな利用形態を社会全体が容認してゆく経緯が、当事者の証言、会議の議事録、空中写真などの分析データを駆使しながら重層的に描かれている。このように、社会内部の動きを遡及的に捉えることで、アフリカ農村における最近の変化が単なる市場経済の浸透ではなく、多様な価値観の変化と連動していたことを明らかにした。

2) 次に、急速にすすむ資源開発が生態系に与える影響について、地形・土壌・気象・水位などの観測データをもとに総合的な考察を加えた学術的な貢献である。資源の利用様式が大きく変化した場合には、その社会的な影響を検討するだけでなく、生態系への影響を捉えながらその持続可能性についても評価する必要がある。申請者は生態環境、とくに水の動きや水環境の変化を継続的に観測することで季節湿地が本質的にもつ生態学的な機能を明らかにすると同時に、耕地化の影響について検討している。ボジ高原には火山灰由来の保水性に富んだ土壌が厚く堆積しており、アップランド全体が大きな貯水槽として機能している。また、季節湿地はなだらかな地形や盃状の地形そのものが表流水の流速を抑える機能を有しており、湿地の耕地化がただちに土壌の浸食や貯水機能の低下を引き起こすものではないと考察を深めた。

3) さらに、コミュニティがもつ環境保全機能について考察した点である。地域の共有資源をめぐる多様な価値が存在し、住民と資源とのかかわりも一様ではない。そのため、利用形態が変化する過程ではさまざまな価値観が衝突することになる。ボジ高原の住民は、対立のなかで地域の文化や宗教に配慮した利用形態を模索し、また農牧複合のなかに見られる矛盾、たとえば耕地化に伴う放牧地の減少が耕作に不可欠な畜力の減少を招くといった事態を回避する方策を探っていた。こうした対立の経験は「いきすぎた開発」への抑止力となり、それが地域社会に新たな規範として内在化する可能性を指摘した。

4) また、環境ガバナンスのあり方についても考察している。地方分権がすすむなか、地方の資源管理は自治体やコミュニティにその采配が委ねられていった。論文では、住民が地域資源の利用と保全について真剣に協議して自ら解決策を導きだしていった経緯を詳細に記述している。また、住民だけでは解決し得なかった問題については、住民の主体的な働きかけに応じて行政が関与し事態の収拾をはかった事例を紹介している。この事例分析は、コミュニティと自治体が連携しながら実施する環境ガバナンスのあり方を構想するうえで示唆に富んでいる。

5) 最後に、土地の利用状況の変化にともなって、コモンズの内容や形態が変化したことと言及している点である。ボジ高原では共有資源である放牧地が縮小していく過程で、住民は共有資源の重要性とその多義性を再評価し、現状に即した必要資源量を経験的に試算する過程を共有していった。そうした過程を経ることで、季節湿地は、もはや豊富な資源であるがゆえの共有地ではなく、稀少化する資源を共有することの意味の再認識が深まっていくことによって意図的に残され、あるいは再び共有地化されていった。このことは、新たな形態のコモンズへと変化したことを示している。これらの事例分析では、他者の生業や経済状況に配慮しつつ新しい状況に応じてコモンズが再定義される社会的プロセスを解明し、アフリカにおけるコモンズ論に新たな視座を提供しており、高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 1 月 26 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。